

## 「アスピジェクト/シス」による感染予防

“われわれが一般的に入手できる局所麻酔用カートリッジの外側は、手術レベルの清潔さを保っているのか？”

といった疑問を以前より抱いていた。

歯科医師の中でも、最も衛生観念に乏しいといわれている補綴科医が感じる程であるから、日常臨床で衛生環境に腐心されている口腔外科医あるいは歯周病科医の方々は、随分悩まれていることと推察する。カートリッジをアルコールあるいはクロルヘキシジン・グルコネート水溶液に浸漬することは、それら薬液の麻酔液への浸透の危険性の観点から禁じられている。問い合わせに対して返ってきた製造販売元の答えは、『浸漬は避けて、酒精綿で外側をよく拭って下さい。』『滅菌になりますか？』『無理ですね。』何とも、心もとない問答となった。欧米では滅菌されているカートリッジが存在するが、それが流通していないわが国では自己防衛するしかない。

一般的な注射筒では、部分的にカートリッジのガラスの部分が露出している。その部分を最小限にすることにより、手術用グラブあるいは手術台の滅菌布への汚染を抑えることができるであろう。以前から北欧では頻用され、羨ましく感じていたアスピジェクト/シスが手に入り、手術中のストレスを大きく軽減できるようになった。しかしながら、依然としてある問題点は解決していない。それは注射針が刺さるカートリッジのゴムの部分で、その部分を酒精綿で丁寧に拭うという不完全な工程を経なくてはならない。

外回りのアシスタントが、カートリッジの外側およびゴムの部分を酒精綿で徹底的に拭い（図1）、それをオートクレーブで滅菌してあるアスピジェクト/シスのバレルに挿入する（図2）。手術中に使う予定数のカートリッジをバレルに収めて、準備しておく（図3）。もちろん、消毒したカートリッジを挿入し、注射針を装着した使用予定数のアスピジェクト/シスを準備しておくならば、手術の効率を高めることができる。

手術中の各種の問題点が少なければ少ないほど、術者ならびにアシスタントは術式そのものに集中できるようになり、患者には安全で、より好ましい治療結果を提供できるようになると信じており、そのための一助として、アスピジェクト/シスを臨床で活用している。

フローネマルク  
オッセオインテグレイション  
センター (BOC)  
院長 小宮山 彌太郎



図1: 酒精綿でカートリッジ外側を良く拭う  
(殊に針が刺さるゴム部分は慎重に)



図2: 消毒したカートリッジを滅菌済みの  
バレルに収める



図3: 消毒済みカートリッジを滅菌済みバレル  
に入れて準備しておく